



①奉納太鼓を行った若睦會 ②氏子による火起こし ③御衣替えにおける祝詞の奏上(奥の宮) ④奥の宮から約700メートル離れている門の宮まで移動 ⑤御衣替えにおける祝詞の奏上(門の宮) ⑥湯立神事 ⑦御衣焚神事



奥の宮では絵馬や「うまく行く守」などのお守りを頒布しています。

蛟蛸神社は、今から約2300年前の孝靈天皇3年(紀元前288年)に、水の神様である罔象女大神を現在の門の宮の場所に祀ったのがその始まりで、文間大明神ともいわれています。

文武天皇2年(698年)には、土の神様の埴山姫大神を合祀し、現在の奥の宮に遷座しました。

蛟蛸の名は、周囲が流れ海であったころの大地の姿が、水を分けて進む水蛇に似ていたことに由来するといわれています。

蛟蛸神社が記録に現れた最初は、延喜5年(905年)に編集を開始し、延長5年(927年)に完成した「延喜式(全50巻)」です。その中の第9巻と第10巻の「延喜式神名帳」に記されている神社は延喜式内社と呼ばれ、全国で2861社のお社があり、蛟蛸神社は「下総國相馬郡一座小社蛟蛸神社」と記されており、水の神様を祀る神社としては、関東最古といわれています。

2300年の歴史

馬鹿待ちと呼ばれ親しまれているこのお祭りは、蛟蛸神社の最も重要なお祭りとして、古式にのっとり執り行われます。

「蛟蛸の神馬と鹿島の神鹿との交歓のある日」だったことから馬鹿待ちと呼ばれるようになりました。宮司によると、現代という婚活や、男女の出会いの場のような側面もあったそうです。

この蛟蛸神社例大祭では、御衣替えと湯立神事、御衣焚神事が行われます。

今年は神事に先立ち、奥の宮で立木地区の青年団である若睦會による奉納太鼓が行われ、重く深い太鼓の音が、境内中に響き渡りました。

続いて、氏子による火起こしが行われました。この火は湯立神事のための水を沸かし、御衣焚神事にも用いられます。

御衣替えでは、奥の宮社殿で祝詞を奏上し、衣替え後、火を松明にともし、



奥の宮で行われる御衣替え

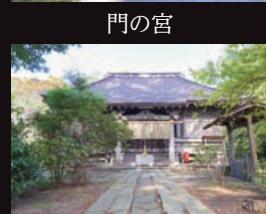


蛟蛸神社

住 所 奥の宮 立木 882
門の宮 立木 2184
駐車場 どちらもあり
電 話 0297-68-7278



奥の宮



門の宮

蛟蛸神社の逸話

「立木」「文間」の名前の由来

日本武尊が東征のために蛟蛸神社で祈願した言い伝えがあります。その時に文馬(かざりうま=綺麗に装飾した馬)を木に繋いだということから蛟蛸神社のある地区を「立木」(たづなをきにつなぐ→たづなき→たつぎ)、神社のある地域を「文間」(文馬→文間)と呼ぶようになりました。



奥の宮の拝殿内、天井には大迫力の龍神画があります。
作者：日本画家 藤田飛鳥氏

裏参道を通じて700メートル離れた門の宮へ向かいます。門の宮社殿でも祝詞を奏上し、御衣替え後、再び奥の宮へ戻っていきます。

湯立神事は、笠貫沼から運んだ水を入れた大釜で湯を沸かし、クマガサを浸して湯を撒く神事です。氏子や崇敬者の無病息災を、ご祈念して行います。

御衣焚神事では、古い神御衣(神様の着物)を茅と真菰の大きな松明の中に納め、多くの参列者が見守るなか、境内中央にて焚き上げます。

御衣焚神事の火が消えると神事は終了し、直会で御神酒が配られ、宮司の挨拶をもつて例大祭は幕を閉じます。

古くから守り、繋げてきたこの例大祭は、神様へ感謝し、人々の絆を深める大切な行事です。